

論文

過山系ヤオ族（ミエン）儀礼神画に関する研究

——湖南省南部及び広西壮族自治区東北部の儀礼神画について——

譚 静

TAN Jing

はじめに

過山系ヤオ族は、民族自称を「ミエン」といい、ヤオ族の中において最も移動性に富む集団であるとされる [吉野 1994: 94]。ミエンは主に中国南部の湖南省、広東省、広西壮族自治区、貴州省、雲南省に分布し、さらに国境を越えてベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーの北部の山地にも広く居住している。本稿で取り扱っているのは、主に湖南省南部に位置する江華瑶族自治县及び、隣接地域の広西壮族自治区の東北部に位置する恭城瑶族自治县に住むミエンの事例である。



図1 中国及び東南アジア北部のミエンの分布地(1)

ミエン儀礼神画に関する研究が始まったのが、80年代初頭からであると考えられる。現在までに出版されたミエン儀礼神画に関する著作は非常に少なく、専門書を書いたことのある研究者は Jacques Lemoine のほかにいない。このフランスの民族学者は、*Yao Ceremonial Paintings* [1982] の中で、自分と8人の個人収集家による収蔵品を紹介しており、約200点のヤオ族儀礼神画を掲出している。著書には、Lemoine 自身がタイ及びラオスに居住するミエンの現地調査の際に撮影した写真を載せ、ミエンの日頃の儀礼について簡単に解説している。神画の部分では、Fam Ts'ing, *The Three Pure Ones* (三清)・*The Jade Emperor and the Master of The Saints* (玉皇と聖主)・*The*

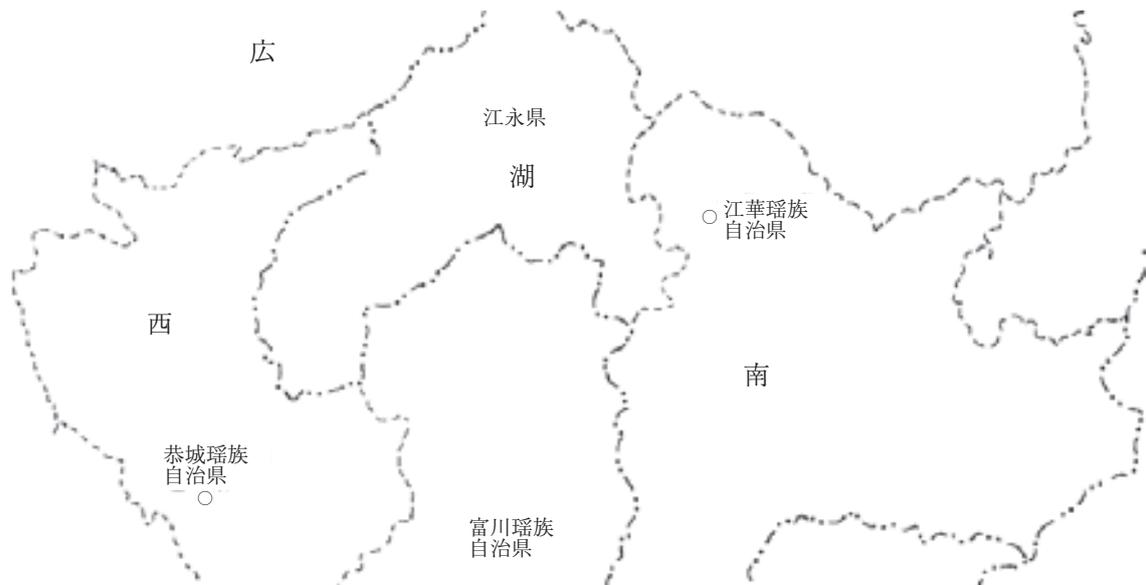


図2 神画資料収集地の江華瑶族自治县・恭城瑶族自治县の位置図

Celestial Masters (天師)・Tai Wai, the High Constable (太尉)・Hoi Fan, 'The Sea Banner' (海旛)・The Governors of This World and The Waters (陽間と水府)・The Governors of the Sky and The Underground (天府と地府)・The lords of the Ten Tribunals of Hades (十殿靈皇)・The Marshals (元帥)・The Three Generals (三將軍)・The Ancestors (息壇)・The Forebears (家先)・The Dragon Bridge of the Great Tao (大道龍橋)・The Enforcers of fasting and chastity (禁齋と禁庚)・P'an Hu's Five Banners of knights (五旗兵馬)・Masksなどに章を分け、膨大な図像資料を提示すると共に、神画に描かれている神々はどのような神であるかについて論じ、神々の装束・姿勢・服飾などについて紹介した。だが、残念なことに神画に描かれる神々についての簡単な論述に留まっており、異なる地域に居住するミエンが持っている同種の神画に描かれる内容に関する比較分析及び考察はなされていない。

本稿では、この研究の空白に焦点を当てて、ミエンの神画にはどのような内容が描かれているのか、湖南省南部と広西壮族自治区東北部の神画に描かれた内容にはどのような共通点及び相違点があるのかについて、比較分析することにより明らかにしていきたい。それを踏まえた上で、神画の読み取りから見たミエンの信仰している神々はどのような神々であるのかを考察し、神画の道教的な影響及び神画から見たミエンの特色について論じる。

1. ミエン儀礼神画とは

神画とは、信仰の対象となる神々の描かれた平面画像の掛軸(掛物)のことを指す。そしてミエン儀礼に用いられる重要な法具の一つである。

ミエンの儀礼神画は、儀礼を執行する祭司によって所有され、通常時は自宅にある祭壇の横に掛けて保管されている。このように見える場所に保管している事例もあれば、祭司の自宅2階にある秘密の場所に置かれて保管される場合もある。儀礼の依頼を受けたら、儀礼が行われる当日、所定の場所

に運び、祭壇周囲の壁に掛ける。祭壇は全て儀礼時に作られるので、神画を掛ける場所もその場で作られる。通常、祭壇正面の左から右に1本の縄を張り渡し、縄に神画を掛け、竹の棒あるいは木の棒を差し込んで安定させる。儀礼が終わると、神画を下ろして1枚ずつ重ね、巻いてひとまとめにしておく。それをビニールで包み、袋に入れたり、白色の布や綿紙⁽²⁾で包んだりもする。そしてそれを⁽³⁾師棍に縛り、肩に担いだり、バイクの後ろに縛り付けたりして持って帰る。

こうした儀礼に使用されている神画は、湖南省南部及び広西壮族自治区東北部に住むミエンは特に「神画」とは呼んでいない。筆者が行った現地調査の際、湖南省南部では、祭司の間で、神画をミエン語で「sing」あるいは「kongta」と呼んでおり、中国語に訳すとそれぞれに「聖」「功德」の漢字が相当するという。また広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷における、年配の祭司間で神画を「liangdougun」と呼んでおり、中国語に訳すと「羊皮卷」の文字に当たるという。また、若い祭司の間では「神像画」あるいは「画像」と呼んでいる。なお、本稿では、儀礼に用いられる信仰神が描かれている絵画という意味で「儀礼神画」という語を用いる。以下略して「神画」という語を使う場合もある。

2. 分析に用いる神画資料について

本稿で分析に用いる神画資料は全部で5組ある。これらの神画資料は、筆者が課題「ヤオ族儀礼神画の研究」（2012年～2014年度神奈川大学日本常民文化研究所・非文字資料研究センターの奨励若手研究者）において、中国湖南省永州市江華瑶族自治县、及び広西壮族自治区恭城瑶族自治县で、2回ずつのフィールド調査を実施し、鄭艶瓊氏（江華瑶族自治县民族宗教事務局紀檢組長・瑶学専門家）及び張晶晶氏（華中師範大学人文社会科学高等研究院助理研究員）の協力の下、江華瑶族自治县で2組、恭城瑶族自治县で3組収集できた神画の写真資料である。以下、これらの神画資料の所有者・保存状況・継承経路などについて詳細に紹介する。

2-1. 湖南省永州市江華瑶族自治县神画

江華瑶族自治县は、湖南省南部に位置する。東は藍山県、南は広東省連州市、西は江永県と広西壮族自治区富川瑶族自治县、北は道県にそれぞれ隣接している。江華瑶族自治县は、中国で最もヤオ族人口が多く、面積の広い瑶族自治县である。

この神画資料は、2013年11月に、江華瑶族自治县⁽⁴⁾で盤王祭を調査した際、写真撮影を行ったものである。その際、江華瑶族自治县民族宗教局の幹部の鄭艶瓊氏は、筆者が神画資料を収集していることを聞きつけ、翌日、自宅に保管してある神画を持参し、写真を撮らせてくれた。

現在この神画は、儀礼には使われておらず、鄭氏の自宅に保管されているという。鄭氏によると、神画は県内の某村から収集されたものであるという。神画の裏面に「馮法真号」という文字が記されており、元の所有者名ではないかと推測される。神画は、17種類17点あり、名称は以下の通りである。

元始天尊（図1-1）、靈寶天尊（図1-2）、道德天尊（図1-3）、玉皇（図1-4）、聖主（図1-5）、



图 1-1 元始天尊



图 1-2 灵宝天尊



图 1-3 道德天尊



图 1-4 玉皇



图 1-5 聖主

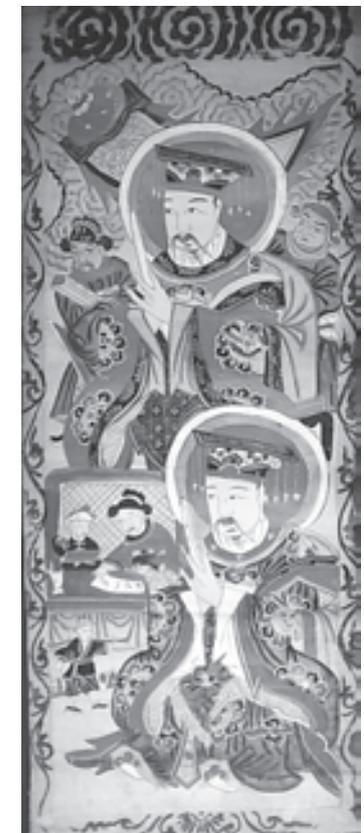


图 1-6 天府



図 1-7 地府



図 1-8 張天師



図 1-9 李天師



図 1-14 海旛



図 1-15 十殿



図 1-16 海旛張趙二郎



図 1-17 太尉



図 1-18 三將軍



図 1-19 総壇



図 1-20 監齋大王

天府（図 1-6）、地府（図 1-7）、張天師（図 1-8）、李天師（図 1-9）、海旛（図 1-14）、十殿（図 1-15）、海旛張趙二郎（図 1-16）、太尉（図 1-17）、三將軍（図 1-18）、総壇（図 1-19）、監齋大王（図 1-20）、大道橋梁⁽⁵⁾

この組の神画は、儀礼に使用されていないため、非常に良い状態で保存されている。元始天尊神画（図 1-1）の下部中央には、銘文が記されており、内容は以下の通りである。

〈銘文〉

今在下梅住居信仕香主馮法全妻趙氏所生男合家眷等発心彩画大堂一十式軸日後家下人丁興旺五谷豊登香門大旺百事大吉子孫永遠為記 福友所帰 丹青 王家義画 道光十六年丙申十一月十七開光吉旦

〈訳〉

今、下梅に居住している信仕香主の馮法全（法名）と妻の趙氏、及び息子の家族が共に、1組 12軸の神画を描くこ

とを発心した。やがて家に人が増え、五穀が豊穰であるように、香火が永遠に盛んになっていくように、全てが大吉になるように、子孫たちは永遠に銘記し、福は帰するように願う。絵師、王家義が描く。道光 16（1836）年 11 月 17 日に開光儀礼を行った。吉日であった。

この組の神画は、「盤王図」という名称で、『湖南民間美術全集・民間絵画』[左 1994：43-51；161-164] に収録されている。図録には、「这是一套道教功德画、於清代道光年間開光。由於在瑶族民間流傳、被習稱為〈盤王圖〉。（訳：これは 1 組の道教功德画である。清代・道光年間に於いて開光儀礼が行われた。ヤオ族の民間で伝承されていたため、習慣的には盤王図だと称する。）」と記されている。さらに、神画毎に説明文も加えられ、どのような神々が描かれているのかについて述べられている。

2-2. 湖南省永州市江華瑶族自治县両岔河郷両岔河村神画

両岔河郷両岔河村は、江華瑶族自治县の最南端に位置する。両岔河村の神画は、祭司の L 法科氏（法名）が所有している。前述したように、2013 年 11 月に、江華瑶族自治县県城で盤王祭の調査を行った。その際、L 法科氏が所有するこの神画は、江華瑶族自治县県城の中心部に建てられた盤王殿の正殿に展示されていた。

神画の中に、太尉と唐葛周三將軍神画は 2 点ずつあり、合計 20 点 18 種類ある。名称は以下の通りである。

元始天尊（図 2-1）、靈寶天尊（図 2-2）、道德天尊（図 2-3）、玉皇星主（図 2-4）、星主（図 2-5）、天府号（図 2-6）、地府号（図 2-7）、張天師号（図 2-8）、李天師号（図 2-9）、馬元帥号（図 2-11）、王靈官号（図 2-12）、海旛号（図 2-14）、十殿号（図 2-15）、海旛全寧号（図 2-16）、太尉号（図 2-17-1）、太尉全寧号（図 2-17-2）、三將軍（図 2-18-1）、三將軍全寧号（図 2-18-2）、⁽⁶⁾ 総壇（図 2-19）、庫官号（図 2-21）

この神画は、あまり良い状態で保存されていない。紙質が老朽化して脆くなり、非常に破れやすい。神画の上部と下部、及び裏にセロハンテープを貼り、破れを補修した跡が多く見られた。

L 法科氏によると、神画は師匠の趙科一郎から継承されたものであるという。もともと神画の裏面に、神画の所有者である「趙科一郎」の名前が記されていたが、L 法科氏は神画を継承した後、師匠の名前を塗り潰し、自分の法名を加えた。まだ消されていない部分もあり、「趙科一郎」の名が確認できることから、L 法科氏の話と一致している。

この神画に銘文は書かれていない。李天師神画の中央部右側に、銘文を書くところが作られてはいるが、文字は書き入れられていない。

三將軍全寧号神画の裏には、「■礼応礼効二人成画」という文字が書かれている。この文字から神画は、礼応と礼効という名前の二人の絵師によって描かれたものだと推測できる。これ以外の記述がないため、神画の制作年代に関しては明確ではない。



图 2-1 元始天尊



图 2-2 灵宝天尊



图 2-3 道德天尊



图 2-4 玉皇星主



图 2-5 星主



图 2-6 天府号



図 2-7 地府号



図 2-8 張天師号



図 2-9 李天師号

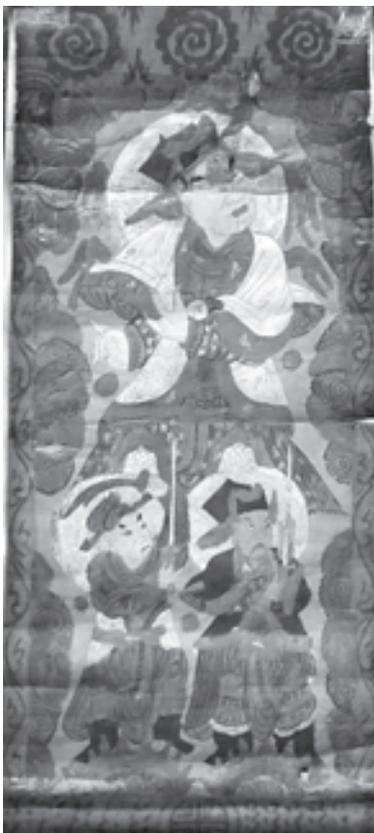


図 2-11 馬元帥号



図 2-12 王靈官号



図 2-14 海旛号



图 2-15 十殿号



图 2-16 海旛全寧号



图 2-17-1 太尉号



图 2-17-2 太尉全寧号



图 2-18-1 三将军



图 2-18-2 三将军全寧号



図 2-19 繪壇



図 2-21 庫官号

2-3. 広西壮族自治区恭城瑶族自治县蓮華鎮神画

恭城瑶族自治县は、広西壮族自治区の東北部に位置する。東は、富川瑶族自治县と湖南省江永県、南は鐘山と平樂県、西は陽朔と靈川県、北は灌陽県がそれぞれ隣接する。蓮華鎮は恭城瑶族自治县県城の南部に位置する。

この神画は、広西壮族自治区恭城瑶族自治县蓮華鎮に在住する祭司のH通旺氏（ミエン人、1943年生まれ）が所有している。合計18点18種類あり、筆者が恭城瑶族自治县蓮華鎮黄泥岡村で行われた盤王祭の調査を行った際に集めた資料である。神画の名称は以下の通りである。

元始天尊（図3-1）、靈寶天尊（図3-2）、道德天尊（図3-3）、玉皇（図3-4）、聖主（図3-5）、天府（図3-6）、地府（図3-7）、張天師（図3-8）、李天師（図3-9）、馬元帥（図3-11）、黄元帥（図3-12）、海番（図3-14）、十殿（図3-15）、太尉（図3-17）、監齋（図3-20）、庫官（図3-21）、王姥（図3-22）、天橋⁽⁷⁾

この神画は、2012年11月に恭城瑶族自治县蓮華鎮黄泥岡村の「盤王祭」において用いられた。その際、大道橋梁神画を除き、他の17点の神画が全て祭祀場に飾られた。

神画は紙ではなく、布に描かれたものである。油絵の顔料で描かれたため、丈夫そうでも色も落ちに

くいと思われる。破損の箇所は特にないが、紙銭を燃やす際に出た煙に燻され、色が黒くなっている。紙製のものより、布製のほうが汚れや煙などを吸収しやすいため、神画が黒くなったと考えられる。

H通旺氏によれば、継承した17点の神画を、元々は自宅に保管していた。しかし文化大革命の際に、紅衛兵によって神画を取り上げられ破却されると案じたH通旺氏の父親が、自ら神画を燃やした⁽⁸⁾という。1992年にH通旺氏は度戒儀礼を経て、新たに18点の神画を制作しようと考えていた。そこで知り合いの紹介で、同省鐘山県に在住している漢族出身の絵師に依頼した。神画制作に際しては、1ヶ月ぐらいかかったという。制作経緯については、元始天尊神画(図3-1)の銘文に書かれている。内容は以下の通りである。

〈銘文〉

因社會形勢■■下無法保留原有神像父親將画毀■後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅花鄉大營村丹清師父楊呈應到大田灣黃法靈家照底彩書滿堂聖像■■■十七尊天橋一條承■家主黃法顛時值■■■幣■■于公元一千九百九十五年季春月吉日成工

〈訳〉

社会情勢により元来所有していた神像を所持することができなくなり、父親が神像を破却した。後に1995年旧暦2月に、鐘山県紅花郷大營村に住む絵師の楊呈應を大田湾にある黄法靈(法名)



図3-1 元始天尊



図3-2 靈寶天尊



図3-3 道德天尊



図3-4 玉皇



図3-5 聖主



図3-6 天府



図3-7 地府



図3-8 張天師



図3-9 李天師



图 3-11 馬元帥



图 3-12 黃元帥



图 3-14 海番



图 3-15 十殿



图 3-17 太尉



图 3-20 監齋



図 3-21 庫官



図 3-22 王姥

の家に招聘し、模写して神像 17 点、天橋 1 条を制作した。家主である黄法顕（法名）は当時人民幣■■元を要し、1995 年旧暦 3 月の吉日に完成した。

この銘文に記された内容は、正に H 通旺氏が語った通りのものであった。銘文によると、黄家が元来継承していた神画がなぜ壊され、また、いつ誰に依頼し、どのような経緯で新たに制作されるようになったのかについて、明記されている。さらには神画を制作するのに必要だった金額と、開光した年月日も記されている。残念ながら、金額の部分は儀礼に使用した雄鶏の血に汚されて読み取れなかったが、2013 年に筆者が現地で調査した際、張晶晶氏から H 通旺氏の神画は 1,500 元かかったと聞き、制作に必要な金額も明確になった。

2-4. 広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江鄉洗脚嶺村神画

恭城瑶族自治县三江鄉洗脚嶺村は、恭城瑶族自治县の東部に位置している。2013 年の調査の際、この村に神画が 1 組あり、祭司の Z 乙昇氏（ミエン人、1965 年生まれ）が所有していた。太尉神画は 2 点あるため、合計 25 点 24 種類の神画がある。中には、名称が分からない神画が 2 点（図 4-25、図 4-26）含まれている。図 4-25 の右上には、「施食」という字が記されているため、以下こ

の神画の名称として使用する。また、図4-26に描かれる内容は、*Yao ceremonial paintings* 中の「Kiem Tsei 禁齋」神画と相似するため、本論では「禁齋」の名称を引用する [Lemoine 1982: 142-145]。この組の神画資料は、2013年の調査で集めたものである。神画の名称は以下の通りである。

元始天尊 (図4-1)、靈寶天尊 (図4-2)、道德天尊 (図4-3)、玉皇 (図4-4)、中天星主 (図4-5)、天府 (図4-6)、地府 (図4-7)、張天師 (図4-8)、李天師 (図4-9)、馬元帥 (図4-11)、王靈官 (図4-12)、海旛 (図4-14)、十殿 (図4-15)、龍樹海旛 (図4-16)、太位 (図4-17-1)、行象太蔚 (図4-17-2)、行象唐角 (図4-18)、行象総壇 (図4-19)、庫官 (図4-21)、王姆娘娘 (図4-22)、四府功曹・左 (図4-24-1)、四府功曹・右 (図4-24-2)、施食 (図4-25)、禁齋 (図4-26)、大道橋梁⁽¹⁰⁾

この神画は、太位と王姆娘娘神画を除き、剝離が非常に激しい。神画を入れた袋を開くと、カビの臭いが漂った。神画の表面を触ると、顔料が粉状になって落ちてくる。また虫に食われた穴、老朽化による破れなども多く見られた。

特に左側の縁が、完全に破損した状態になっている。Z乙昇氏によると、神画を濡れた地面に置いたことがあり、ビニールで包んでいなかったため、神画が水を吸い込み、左側の縁が全て駄目になってしまったという。

張晶晶氏の口述によれば、この神画は、Z家の先祖から受け継いだものではないという。Z家の神画は、「批林批孔運動」⁽¹¹⁾の際に、燃やされたとされる。現在持っているこの神画は、大界厄(地名)に住んでいた同姓の家から得たものであるという。大界厄の趙家の子孫たちが、嫁や婿に行ってしまう、神画を受け継ぐ人がいなかったため、Z乙昇氏の父親がこの神画を譲り受けたとされる。現在、この神画の裏には「趙法秀」という法名が記されており、神画の元の所有者の法名であると推測できる。

Z乙昇氏によると、神画を家に迎えた日に、自宅で「合兵合將道場」⁽¹²⁾の儀礼が行われたという。また儀礼の中で、「掛兵」、「請接兵頭」などの小儀礼も行われた。この儀礼を通して、神画はZ乙昇氏の所有物になったということである。

調査の際に、現在現地において1組の神画を新たに制作するのに、約1万元(2013年11月27日現在。約178,500円)を要すると聞いた。制作費用を捻出することができないため、破損の激しい神画を使い続けているという。

この組の神画の中に、銘文が記された神画が2点ある。即ち、太位と王姆娘娘神画である。銘文は神画の裏に記されている。太位神画(図4-17-1)の裏に記されている銘文は、「主制人趙文学。趙佳保描画。一九八七年十一月十八日。」となり、王姆娘娘神画(図4-22)の裏に記されている銘文は、「主制人趙文光。絵画趙佳保。一九八七年十二月初十日。」である。

「趙文学」と「趙文光」が誰なのか明確ではないが、2点の銘文から、1987年に、「趙文学」と「趙文光」は、「趙佳保」に依頼し、太位と王姆娘娘の神画を描いてもらったことが分かる。銘文の日付から見ると、当時、1点の神画を描くのに、約3週間かかったことが推測できる。

張晶晶氏の口述によると、「趙佳保」は栗田(地名)の人であり、教員の経験があって絵が描けた



図 4-1 元始天尊



図 4-2 靈寶天尊



図 4-3 道德天尊



図 4-4 玉皇



図 4-5 中天星主

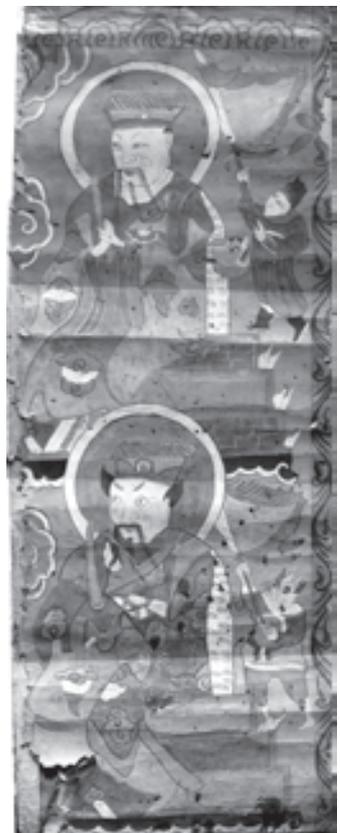


図 4-6 天府



图 4-7 地府



图 4-8 張天師



图 4-9 李天師



图 4-11 馬元帥



图 4-12 王靈官



图 4-14 海旛



図 4-15 十殿

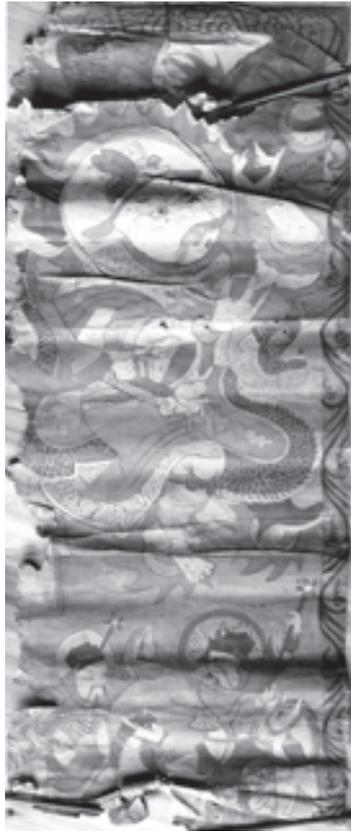


図 4-16 龍樹海旛



図 4-17-1 太位



図 4-17-2 行象太蔚



図 4-18 行象唐角



図 4-19 行象総壇



图 4-21 庫官



图 4-22 王姆娘娘



图 4-24-1 四府功曹·左



图 4-24-2 四府功曹·右



图 4-25 施食



图 4-26 禁齋

とされる。当時、Z乙昇氏の上屋（同村・同族）の家は神画を新たに制作するため、「趙佳保」に依頼したとする。その際、Z乙昇氏も太位と王姆娘娘の2点の神画を依頼した。この2点の神画は、上屋の家で所有していた神画を参考にして制作され、開光儀礼もその家の神画と共に済ませたとされる。

この2点の神画は、他の神画と比べて新しいものである。しかも布に描かれているため、破損が全くなく、比較的良い状態で保管されている。この2点を除いた他の神画は破損が非常に激しく、古く感じられる。

2-5. 広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷養牛坪神画

三江郷養牛坪は、恭城瑶族自治县の東部に位置している。現地の神画は、養牛坪在住の祭司が所有するものである。2013年11月に、筆者は恭城瑶族自治县で調査した際に、張晶晶氏の協力の下、祭司のF法香氏（法名）から、神画の写真データを入手した。神画に関する継承の状況等の情報は未だ明確ではない。神画は、合計15点15種類ある。名称は以下の通りである。

元始天尊（図5-1）、靈寶天尊（図5-2）、道德天尊（図5-3）、玉皇（図5-4）、聖主（図5-5）、天府（図5-6）、地府（図5-7）、張天師（図5-8）、李天師（図5-9）、馬元帥（図5-11）、王靈官（図5-12）、海旛（図5-14）、十殿（図5-15）、太尉（図5-17）、庫官（図5-21）⁽¹³⁾



図5-1 元始天尊



図5-2 靈寶天尊



図5-3 道德天尊



图 5-4 玉皇



图 5-5 聖主



图 5-6 天府



图 5-7 地府



图 5-8 張天師



图 5-9 李天師



図 5-11 馬元帥



図 5-12 王靈官



図 5-14 海旛



図 5-15 十殿



図 5-17 太尉



図 5-21 庫官

3. 異なるミエン地域の同種の神画に描かれる内容の異同

前節で湖南省南部及び広西壮族東北部の異なるミエン地域から収集した5組の神画資料について紹介した。神画の名称及び神画に描かれている内容によって、全ての神画が23種類に分類でき、即ち、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府、張天師、李天師、馬元帥、王靈官、海旛、十殿、海旛張趙二郎、太尉、三將軍、総壇、監齋大王、庫官、王姥、大道橋梁、四府功曹、施食、禁齋神画である。この5組の神画の中に、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府、張天師、李天師、馬元帥、王靈官、大海旛、十殿、海旛張趙二郎、太尉、三將軍、総壇、庫官の種類がほとんど入っていることが確認できる。これらの異なるミエン地域において共通している種類の神画は、本論での読み取り及び分析の主な対象となるものである。

3-1. 元始天尊神画に描かれる内容について

『道教事典』によれば、「天尊、道教における最も尊貴な天神の称。三清の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇といわれる玉皇大天尊、太一でいう太一救苦天尊などがこれである」という〔野口ほか 1994：429〕。また、「元始天尊、隋唐道教の最高神の名」とされる〔野口ほか 1994：128〕。

元始天尊神画の全体的な構図として、中央部に大きく元始天尊像が描かれ、下部の両側に各一人の脇侍が配される。

元始天尊は、御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を被る。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所、やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒色である。龍袍を着、袍には龍と瑞雲の模様が見える。あげ衿はお腹のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。あげ衿の合わせたところに神獣模様のものが見えるが、帯に付ける魔除けの装身具であると考えられる。

元始天尊の両腕の姿勢に関しては、左腕を内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結ぶ。右腕を内側に約60度曲げ、右手は上を向けて手訣を結ぶ姿勢をとる。図2-1・図5-1は、左腕を内側に約90度曲げ、左手は上を向け、手に酒杯を持つ。右腕を内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結ぶ姿勢をとる。元始天尊が着ている龍袍の色に関しては、主に黒色で描かれている。

元始天尊の下部の両側に、光背を配した脇侍が中央を向いてそれぞれ立っている。脇侍は男女のことが多いが、必ずしも男女を揃えて描かれているわけではなく、二人とも男性の脇侍、あるいは二人とも女性の脇侍であるケースも見られる。女性の脇侍なら、雲帔という肩かけをし、⁽¹⁶⁾ 裙を穿き、両手は胸の前に出し、供物を盛る丸盆を持つ。男性の脇侍なら、文官と武官の区別があるが、文官は袍を着、⁽¹⁷⁾ 両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つ。武官は、鎧あるいは武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を被り、手に鞭や錘などの法具を持つ。⁽¹⁸⁾ 神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-2. 靈寶天尊神画に描かれる内容について

『道教事典』によれば、「靈寶天尊、三清境（三天）の一つの上清境（禹余天）の主神」という〔野口ほか 1994：612〕。

靈寶天尊神画の全体的な構図として、靈寶天尊像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。

靈寶天尊は、左腕を内側に約 120 度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結び、蓮華を持っている。右腕を内側に約 60 度曲げ、右手は上向きで蓮華の柄を支え、御座に座る姿である。靈寶天尊の上半身と頭部に円環と炎状の光背を配する。髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を被る。鼻の下・耳の下・顎先の 3 箇所、やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒色である。緑色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。あげ衿の合わせたところに、神獣模様の装身具が見える。その下に綬帯を垂らして飾る。靈寶天尊が着ている龍袍の色に関しては、主に緑色及び深緑色で描かれているが、図 1-2 のように紺色のものも見られる。

靈寶天尊の下部の左右に、光背を配した男女脇侍がそれぞれ立っている。脇侍は向かって左を向いているものがほとんどである。靈寶天尊神画に描かれている男女の脇侍は、元始天尊神画と似ている装束を身に着けている。また、神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-3. 道德天尊神画に描かれる内容について

『道教事典』によれば、「道德天尊、中国における道教の神。三清の天界のうち、太清天に住まって、玉清天に住まう元始天尊、上清天に住まう靈寶天尊とともに、道教三尊、あるいは三宝と称する」という〔野口ほか 1994：461〕。

道德天尊神画の全体的な構図として、神画の中央部に道德天尊像が大きく描かれ、下部両側に二人の従者が描かれている。

道德天尊は御座に座る姿勢であり、右腕を内側に約 120 度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結び、団扇を持っている。左腕を内側に約 60 度曲げ、手は上向きで手訣を組み団扇の柄を支える。道德天尊の上半身と頭部に円環と炎状の光背を配し、髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を被る。鼻の下・耳の下・顎先の 3 箇所、やや長い鬚を生やす。眉・髪と鬚の色は全て白である。藍色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図 1-3 と図 3-3 は緑色であると見える。龍袍のあげ衿の合わせたところに、神獣模様の装身具が見え、その下に綬帯を垂らして飾られている。

神画下部の両側に、光背を配す男女の脇侍がそれぞれ立っている。二人とも向かって右を向いているものが多い（ただし、図 1-3 は左向き）。道德天尊神画に描かれている男女の脇侍は、元始天尊神画及び靈寶神画と同様の装束である。

3-4. 玉皇神画に描かれる内容について

『道教事典』によれば、「玉皇大帝、宋代以降の中国民間諸神中の最高神。玉皇・昊天玉皇・天帝などともいわれる」という〔野口ほか 1994：105〕。

玉皇神画の全体的な構図として、玉皇像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。

玉皇は御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに瑞雲が描かれている。頭に帝王を象徴する冕(19)というかんむりを被り、冕の両側に旒(19)が描かれている。鼻の下・耳の下・顎先の 3 箇所にやや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒である。玉

皇は黄色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図 2-4 は赤色である。袍のあげ衿はお腹のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。玉皇は両腕を、内側に約 90 度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持った状態で描かれている。ただし、図 3-4 に描かれている玉皇は手に圭を持っていない。また図 3-4 の玉皇の両手は袖の中に隠れて見えないが、図 1-4、図 2-4、図 4-4、図 5-4 は袖から出ているのが確認できる。

玉皇の下部の左右に、光背を配した脇侍がそれぞれ立っている。脇侍は、二人とも中央を向いている。脇侍は男性が圧倒的に多いが、図 3-4 に描かれている二人の脇侍のみ女性である。女性の脇侍は冠を被り、袍を着、裙を穿き、両手を胸の前で合わせて圭を持ち、女官の装束を身に着けている。男性の脇侍は、文官と武官の区別がある。文官は袍を着、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持つが、図 2-4 に描かれた脇侍の手には書物のようなものを持っている。武官は、武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を被り、手に鎗などの法具を持つ。また図 3-4 の二人の脇侍の間の方には、位牌のようなものが描かれているが、そこに文字は記されていない。また図 5-4 の脇侍の間の方には、赤い帽子を被っている半裸の小さい人が描かれており、この小人は左腕を頭の上に上げる姿勢をとっている。神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-5. 聖主神画に描かれる内容について

聖主神画の全体的な構図として、聖主像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。

聖主は御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに瑞雲が描かれている。頭に帝王を象徴する冕を被り、冕の両側に旒が描かれている。鼻の下・耳の下・顎先の 3 箇所やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒である。聖主は黒色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図 2-5、図 4-5 に描かれている聖主の龍袍は黄色であり、図 1-5、図 3-5、図 5-5 は赤色である。袍のあげ衿はお腹のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。聖主の両腕は、内側に約 90 度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持った状態で描かれている。

聖主の下部の左右に、光背を配した脇侍がそれぞれ立っている。脇侍は、中央を向いており、全て男性である。脇侍の装束を見ると、文官と武官の区別がある。文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つが、図 1-5 の脇侍は書物のようなものを持っている。武官は、鎧あるいは武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を被り、手に剣などの法具を持つ。また図 5-5 の脇侍の間の方には、赤い帽子を被っている半裸の小さい人が描かれており、この小人は左腕を頭の上に上げる姿勢をとっている。神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-6. 四府神画に描かれる内容について

ミエン儀礼神画の中で、四府が描かれている対となる 2 点の神画がある。1 点の神画にはそれぞれ二神が描かれ、合わせて天府・地府・水府・陽間の四神が描かれる。*Yao ceremonial paintings* によると、タイではこの種類の神画において、天府と地府を 1 点に、陽間と水府を 1 点にまとめて描かれるとされる [Lemonie 1982]。しかし、湖南省永州市江華瑶族自治县、及び広西壮族自治区恭城瑶族

自治県で、この2点の神画はそれぞれ「天府」と「地府」と呼ばれるため、天府と地府の二神を1点の神画にまとめて描かれていない可能性があると考え。また、神画に描かれる四神の服飾・姿勢・冠物・持物は非常に近似するため、具体的にどの神が天府・地府・水府・陽間であろうかははっきりと区分できない。よって、本稿では、この種の神画に対して、「四府」神画という語を用いる。対となる2点の神画に描かれる内容を読み取る際に、「四府（左）」と「四府（右）」の語を用いる。向かって右を向いているのが「四府（左）」で、向かって左を向いているのが「四府（右）」である。

3-6-1. 「四府（右）」に描かれる内容について

四府（右）神画の全体的な構図として、主神の二神がそれぞれに神画の上部と下部に描かれ、主神の後ろには脇侍が配される。

まず上部に描かれている主神を見てみよう。主神は、向かって左を向いており、頭部に円環形の光背が配され、立った姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を被っており、冕の両側に旒が垂れ下がっているが、描かれた旒の本数は片側1本から3本まであり、完全に一致するものがない。また図2-6、図4-6、図5-6の冕の両側には旒が描かれていない。主神の眉・眼・髪と鬚の色は全て黒色である。黄色の帝王式の袍を着るが、中には赤色・藍色のものも見られる。図1-6は赤色、図2-6と図3-6は藍色である。袍は主に瑞雲や花などの模様が描かれるが、また図3-6のように龍の模様が描かれているものも見られる。主神の両腕は内側に90度曲げられ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持っている。主神の後ろに、旗を掲げる脇侍（一人）がいる。ただし、図1-6、図2-6、図3-6は、主神の後ろの両側に各一人の脇侍が描かれており、向かって右側の脇侍は旗を掲げ、向かって左側の脇侍は文書のようなものを持っている。脇侍は全て男性で、文官あるいは武官の装束をしている。以上は神画上部に描かれている主神と脇侍らである。

次に、神画下部に描かれている主神と脇侍を見てみよう。神画下部に描かれる主神は、上部の主神の姿勢や装束などと比べてほぼ同じである。向かって主神は左を向き、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を被っている。主神の眉・眼・髪の色は全て黒色である。主に赤色の帝王式の袍を着るが、また紺色・緑色・藍色の袍も見られる。図1-6は紺色、図3-6、図4-6、図5-6は藍色である。神画下部に描かれる主神は、上部に描かれる主神の姿勢と同様で、手に圭を持っている。主神の周囲に一般的には脇侍は描かれないが、図4-6、図5-6には旗を掲げる鬼形の脇侍が見られる。鬼の脇侍は帽子を被らず、袴を穿き、腰巻を巻いている。

神画の背景として、一般的に瑞雲が描かれるが、四府（右）の場合は、神画の下部の左側あるいは右側に官府の片隅⁽²⁰⁾が見られる。そこにはテーブルが描かれ、上に筆置きや紙などのものが置かれ、テーブルの後ろに官員と官員の従者様の人物が描かれている。さらに、図1-6、図3-6には、テーブルの手前側に、箱と銅銭を担いで笠を被る庶民装束の「運財童子」が見られる。

3-6-2. 「四府（左）」神画に描かれる内容について

前述したように、この種類の神画は対となるものである。そのため、四府（左）神画は四府（右）神画が逆転したように見られ、神画に描かれている神々及び脇侍の特徴や、神画の背景などもほぼ一

致している。重複するように見えるかもしれないが、四府（左）神画に描かれている内容を読み取る。

四府（左）神画の全体的な構図として、天府神画と同様に、主神の二神がそれぞれ神画の上部と下部に描かれ、主神の後ろには脇侍が配される。神画の上部には、ほとんど字が記されていないが、図 3-7 の上部にのみ、「地府左」（右から左へ）と書かれている。

まず上部に描かれている主神を見てみよう。主神は右を向いているが、図 4-7 と図 5-7 の主神は左を向いている。主神の頭部に円環形の光背が配され、立ち姿あるいは御座に座る姿勢で描かれている。主神の眉・眼・髪と鬚の色は全て黒色である。頭に帝王を象徴する冕を被っており、冕の両側に旒が描かれている場合とそうでない場合がある。帝王式の袍を身に着けている。袍の色は黒色・緑色・赤色であり、図 1-7 は黒色、図 2-7 と図 3-7 は緑色、図 4-7 と図 5-7 は赤色である。袍には瑞雲や花などの模様が描かれる。主神の両腕は内側に 90 度曲げられ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持っている。主神の後ろに旗を掲げる一人の脇侍が立っている。だが、図 1-7、図 3-7、図 4-7、図 5-7 には、主神の後ろの両側に各一人の脇侍が描かれており、片方の脇侍は旗を掲げ、もう一方は文書のようなものを持つか、あるいは何も持たない。脇侍は全て男性で、天府神画に描かれている文官と武官の装束とはほぼ同様である。また、脇侍らは主神と同じ方向（図 2-7 のみ反対向き）に向いている。以上が神画上部に描かれている主神と脇侍である。

次に、神画下部に描かれている主神と脇侍を見てみよう。神画下部に描かれる主神は、上部の主神の姿勢や装束などと比べてほぼ同様のものである。主神は右を向き、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を被っている。主神の眉・眼・髪と鬚の色はほとんどが黒色であるが、図 1-7 の下部の主神は、白い眉・髪・鬚の老人像として描かれている。また、図 3-7 の下部の主神の眉・髪・鬚は、真っ赤である。主神は帝王式の袍を着、袍の色は紺色と藍色がある。図 1-7 は紺色、図 3-7、図 4-7、図 5-7 は藍色である。神画下部に描かれる主神は、上部に描かれる主神の姿勢と同様で、手に圭を持っている。一般的には神画下部に描かれる主神の周囲に脇侍は描かれませんが、図 2-7、図 4-7、図 5-7 には旗を掲げる脇侍が見られる。各神画に描かれているこの脇侍は、武官の装束（図 2-7）、鬼の装束（図 4-7、図 5-7）となっている。四府（左）神画の背景と四府（右）神画の背景はほぼ同じである。神画下部の右側に、官府の片隅が見られる。そこには、テーブルが描かれ、その上に筆置きや紙などが置かれ、テーブルの後ろに官員と官員の従者様の人物が描かれている。図 1-7、図 3-7 には、「運財童子」が描かれている。

本項では、左右の四府神画に描かれている内容の読み取りにより、この種の神画に描かれている四神の基本的な特徴と姿勢は非常に類似しており、天府・地府・陽間・水府の四神は一体誰なのかを見分けるのが非常に困難である。

3-7. 張天師神画に描かれる内容について

『道教事典』によれば、「張天師、正一教（派）の教主一般的な呼称。正一教では五斗米道を唱えた張陵を始祖とし、張陵を天師と称した事から教主を天師、教団を天師道と称し、教主は張陵の子孫に世襲された。後に天師道は正一教、天師は真人と改められたが、民間では正一教主を張天師と呼称して現在に至っている」という〔野口ほか 1994：408〕。

張天師神画には、張天師は神画の中央部に大きく描かれるが、脇侍が配されていない。張天師は、

両腕を内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で左を向く。張天師の頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。張天師は三つの眼を持ち、三つ目の眼は額の中心にある。髪の毛は頭頂で結び、その上に髪冠を被る。両鬢の髪の毛は犬耳のように立っている。眉尻を高く上げ、目は丸く大きく見開く。鬚は鐘馗のように鬢まで続いている。眉・眼・髪と鬚の色については、図5-8が赤色で、図1-8、図2-8、図3-8、図4-8が黒色である。張天師は袍を着るが、八卦模様（☰・☷・☱・☴・☵・☶・☲・☳）の八卦袍と龍袍も見える。図3-8、図4-8の張天師は八卦袍を着る。また図2-8、図5-8は花と瑞雲模様の袍を着ている。袍の色に関しては、主に赤色で描かれているが、中には白色のものも見られる。図3-8は白色である。神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-8. 李天師神画に描かれる内容について

李天師神画と張天師神画は対となるものである。通常李天師は右を向き、張天師は左を向いて描かれる。

李天師は神画の中央部に大きく描かれ、脇侍が配されていない。両腕を内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で右を向く。通常立つ姿勢で描かれているが、麒麟や獅子に乗る姿で描かれる場合もある。李天師の頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。通常髪の毛は頭頂で結び、その上に髪冠を被る。眉・眼・髪と鬚の色は黒色であるが、図2-9の髪の毛は緑色で描かれている。李天師は八卦袍あるいは龍袍を着る。また花と瑞雲模様の袍を着る場合もある（図1-9、図2-9、図5-9）。袍の色に関しては、通常黒色で描かれているが、他には紺色と藍色も見られる。図1-9は紺色で、図2-9、図4-9と図5-9は藍色である。神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-9. 馬元帥神画に描かれる内容について

馬元帥は先述したように、元帥神が描かれる神画中の一種類である。馬元帥神画の全体的な構図としては、中央に主神である馬元帥を大きく描き、下部には二人の男性の脇侍が描かれているものが多い。また、神画の上部に「馬元帥」という文字が書かれているのも見られる（図3-11）。

馬元帥は立ち姿であり、右を向く。手に圭（図5-11）、あるいは鉞（図3-11）を持つ。右腕はやや曲げて体の横に置き、手は手訣を結ぶ。武官の帽子を被り、頭部に輪状の光背を配した、肌の白い若い男神である。通常黄色の上着を着るが、緑色の上着を着て白色の裳を穿いて描かれる場合もある（図3-11）。

神画下部の左右に、二人の武官姿の男性の脇侍がそれぞれ立っている。向かって左側の脇侍は武官の帽子を被り、藍色の袍を着、腰に白色の腰巻きを巻く。図3-11に描かれている向かって左側の脇侍は、帽子を被っておらず、髪の毛を頭頂で結び頭巾で隠す。白色の衣を着、腰に白色の腰巻きを巻き、黄色の裳を穿く。素足で靴を履いていない。左腕はやや上へ上げ、手に黄色の盃を持っている。向かって右側の脇侍は、黒色の衣を着、黄色あるいは赤色の裳を穿く。武官冠を被り、帽子の両側に犬耳のような髪の毛が立っている。鬚は鐘馗のように鬢まで続いている。眉尻が上にあがる。髪の毛と鬚の色は真紅である。右腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、左手は剣身を支える。また神画の背景と

しては、瑞雲が描かれている。

3-10. 王霊官神画に描かれる内容について

窪徳忠によれば、「王霊官は、姓は王、名は奕または善といい、元始天尊の命をうけた姜子牙すなわち呂尚によって、九天応元雷声普化天尊に任命された聞仲の指揮下に属している雷部二十四神の中の一人で、雷を起し、雨を助ける神となっている」という [窪 1986 : 217-218]。

王霊官神画は、また「黄元帥」とも書かれる (図 3-12)。中国の西南官話では、「黄 (huáng)」と「王 (wáng)」の字の発音が非常に似ているので、「黄元帥」は「王元帥」の書き間違いではないかと考えられる。本稿では、筆者の聞き書きにより、「王霊官」という名称を用いる。

神画の全体的な構図としては、主神である王霊官が中央部に大きく描かれ、下部に二人の脇侍が描かれている。神画の上部には、「黄元帥」という文字が書かれている (図 3-12)。

元帥は立った姿勢で、左を向く。右腕は内側に曲げて胸の前に置き、手に剣を持つ。左腕はやや曲げて体の横に置き、手訣を結ぶ。頭に髪冠を被り、冠の両側に犬耳のような髪の毛が立っており、勇猛そうに見える。鬚は鐘馗のように鬚まで続く。眉・鬚・髪の色は全て赤色である。額の中心に三つ目の眼がある。

神画下部に、二人の武官装束の男性の脇侍がそれぞれ立っている。向かって左側の脇侍は武官冠を被り、武官式の衣裳を着、左腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、右手は剣身を支える。向かって右側の脇侍は、口が鳥のくちばしのようにになっており、三つ眼を持つ。上半身は裸で、赤色あるいは藍色の裳を穿き、腰に虎皮を巻く。右手で斧を持ち、上に高く上げ、左手は胸の前で錐を持っている。両足は鶏の脚のようにになっており、素足で火車を踏む。髪と眉毛は真紅であり、背中に羽が伸び、皮膚は青色である (図 4-12)。神画の背景として瑞雲と炎が描かれている。

3-11. 大海旛神画に描かれる内容について

ミエンが伝承している神画の中で、「海旛」という神が描かれる神画は二種類ある。神画に描かれる内容によって区別するなら、「上刀梯」と呼ばれる刀の梯子を登る儀礼の場面などが描かれるのは「大海旛」神画であり、黒蛇に乗る場面が描かれたのは「海旛張趙二郎」神画であると考えられる。「大海旛」「海旛張趙二郎」という名称中に、いずれも「海旛」の二文字を使っており、しかも神画に描かれるこの二神の着ている服装や装束なども非常に似ているので、同じ種類の神と推断する。

大海旛神画全体の構図としては、大海旛は神画上部の中央に大きく描かれ、神画の左側の下部には刀の梯子を登る場面などが描かれている。

まず刀の梯子を登る場面から見ていきたい。神画の左側に「雲台」と呼ばれる高い檣のようなものと、そこに掛けられた刀の梯子が描かれている。梯子は約 24 本の長い刀を交差させて組まれている。梯子の左側に竹葉が生えている竹竿が立っており、その枝に黄色の細長い旛が掛けてある。さらに、旛には「太上昊天金闕陽田大旛堂樹」(図 2-14)、あるいは「太上昊天金闕陽傳大旛堂樹」(図 4-14) という文字が書かれている。「雲台」の上には、一人あるいは二人の祭司のような者が描かれている。彼らは赤色あるいは藍色の袍を着、手に法具の角笛や師棍などを持っている。

刀梯 (刀の梯子) を登る者が二人描かれ、そのうち一人はあと少しで「雲台」の上に届きそうで、

刀梯を掴みながら下から登ってくる者を眺めている。下にいる者はまだ二段くらいしか登っておらず、両手で梯子を掴み、足先で慎重に刀の上を登っている。二人共赤色あるいは深緑色の袍を着、素足である。さらに、図 1-14、図 2-14 の下から登ってくる者は右手に角笛を持っていると見られる。その二人と共に、大海旛も一緒に梯子を登っている。大海旛の両足は素足で、足首から膝まで脚絆を巻いている。右足は刀梯の中段あたりを踏み、右手は刀梯の最上段を掴み、左腕は内側に曲げて胸の前に置き、手に酒盃を持っている。大海旛の服装に関して図 1-14、図 2-14 は、藍地あるいは黒地の上着を着て赤い裳を穿いている。大海旛は冠を被らず、頭に赤色の縄を縛り付け、両方のこめかみのところに一枚ずつ符を挟んでいる。

向かって下部の左側には、祭壇が描かれている。祭壇の右側には、5～6人の楽師がおり、チャルメラを吹いたり、笛を吹いたり、鑼鼓を鳴らしたりする様子が描かれている。楽師たちの上部に、黒龍に乗っている上半身裸の男性が描かれ（図 2-14、図 4-14、図 5-14）、神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-12. 十殿神画に描かれる内容について

十殿神画は、10人の閻王及び地獄の風景が描かれる神画である。「十王とは冥界にあって亡者の罪業の処断を司る10人の王、すなわち秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、變成王、太山王、平等王、都市王、五道転輪王を指す」という〔津田 1991:51〕。

右の下から右の上、上部を通して左の上から左の下に至るまで、「一殿」から「十殿」までの十王が描かれている。十王とも帝王が被る冕を被り、袍を着、神画の中央を向いて描かれている。通常「一殿」から「十殿」までが描かれるが、具体的にどの王であるのかは明記されない。

10人の閻王が囲まれている神画上部にある空間と、神画の下部には、幾つかの地獄の風景が描かれている。神画の一番下に描かれている「地獄門」から上まで順番で見たい。

通常神画の一番下には、「地獄門」が描かれており、左右には馬頭と牛頭が立っている。またその両側に、上半身が裸の罪人の両手を引っ張って地獄に入れようとする獄卒（地獄鬼）が描かれている。

地獄の門の上部には、橋とそこを渡る3名の女性が描かれている。この橋は「奈何橋」と考えられる。その上には瑞雲で幾つかの空間に分けられている。下から上まで見ていくと、向かって左側には鋭い刀の山があり、獄卒は罪人をその山の上に投げ、突き刺さった罪人の血が山に満ち溢れる様子が描かれている。向かって右側には、獄卒が猛火に罪人を入れたり釜に入れようとする様子が描かれている。さらにその上部には、大きな釜が描かれ、獄卒が罪人を釜に入れて鉄の棒で刺し、煮る様子が描かれている。その横には、獄卒が罪人を踏み、臼で粉碎している様子が描かれ、またその横では、一人の獄卒が刀を持ち、罪人の髪の毛を掴んで体を切る様子が描かれている。また、その上部には、罪人を臼で粉碎している様子や、二人がかりで罪人を鋸で切り裂く様子がそれぞれ描かれている。さらに、秤で罪人の罪を測る様子や大きな鏡の横で、二人の役人が罪人をその前に立たせ、前世の罪を映している様子などが描かれる。

3-13. 海旛張趙二郎神画に描かれる内容について

海旛張趙二郎神画全体の構図として、中央に海旛張趙二郎が描かれ、下部の両側に一人ずつ従者が

描かれている。

海嶺張趙二郎は右を向き、黒龍に乗っている。虎皮の肩掛けを掛け、赤色のズボンを書く。素足で足首から膝まで縞模様の脚絆を巻き、赤い紐で縛っている。右腕を内側に約90度曲げ、胸の前で酒盃を持ち、左腕は高く上げ手訣を結ぶ。海嶺張趙二郎の靴の片方は膝の前に、もう一つは大蛇の尻尾の先に被せた様子が描かれている。

海嶺張趙二郎に乗っている黒龍は、頭をもたげ、大きな目が上方を見る。額の中心に角を一本生やしている。口を大きく開け、真赤な舌を出し、上下に牙を生やしている。神画の上部の右側と、海嶺張趙二郎の足の下には、大きな球状のものが描かれている。球の周囲に炎が描かれていることから、火玉であると推察される。

神画の下部には、馬に乗る二人の武将姿の男性の従者が描かれる。向かって左側の武将は、主神と同じく右を向く。右側の武将は、振り返って左側の武将を見ている。神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-14. 太尉神画に描かれる内容について

太尉神画の全体的な構図として、中央部に太尉が大きく描かれ、太尉の後ろに一人の旗を持つ脇侍が配され、神画の下部に馬に乗る脇侍が描かれている。

太尉の体は左向きで、顔は正面を向く。通常武官の冠を被り、赤色の袍を着、白馬に乗る姿勢で描かれる。時には紫がかった深赤色の袍を着、黄色の馬に乗るものも見られる(図4-17-2)。右腕は高く上にあげ、手に長い剣を持っている。左腕は内に曲げ胸の前に置き、手に酒盃を持つ。腰には花模様の腰巻を巻き、黒色の長靴を履く。

太尉神画の下部には、馬に乗る二人の脇侍が描かれている。時には3人、あるいは5人描かれることもある。これら脇侍たちは、武官帽を被り、武官の衣裳を着、手に剣あるいは角笛などの法具を持っている。神画の背景としては瑞雲が描かれている。

3-15. 三將軍神画に描かれる内容について

三將軍は即ち、道教神の上元唐將軍・唐文明、中元葛將軍・葛文慶、下元周將軍・周文剛であるという[王ほか1989:99-100]。

三將軍神画の構図としては、瑞雲で神画を上中下の三つの部分に分け、それぞれの空間に一人ずつの將軍が描かれている。三人の將軍とも、兜を被り、鎧または武将の衣裳を着て、左を向いている。以下、上部の空間から下部の空間まで、各々の將軍の姿を見ていきたい。

上部に描かれている唐將軍は、右腕を高く上にあげ、手に剣を持っているか手訣を結ぶ姿が描かれている。中部に描かれている葛將軍は左手で指笛を吹くしぐさをする(図1-18)。あるいは両手に剣を持ち、片方は胸の前に置き、もう一方の手は後方に出している。下部に描かれている周將軍は、葛將軍と同様に、指笛を吹くしぐさをするか、矢を射る姿勢を作る。神画の背景として瑞雲が描かれている。

3-16. 総壇神画に描かれる内容について⁽²¹⁾

本稿で取り扱う5組の神画資料の中には、儒仏道そして過山系ヤオ族の神々が一堂に描かれているとされる「衆神図」がある。この種の神画は「総壇」と呼ばれる。

総壇神画には、他の種類の神画に描かれる主神らも含めて約70柱以上の神々が描かれている。しかも神々の位により、上から順番に九つの階層に分けて描かれている。神画の構図としては、それぞれの階層の中央に主たる神を描き、左右両側の神々は中央に向かって拝謁する姿勢をとる。

総壇神画の一番上となる第1層には、長方形のテーブルが描かれ、そのテーブルのところに炎状の光背が配された三清（元始天尊・靈寶天尊・道德天尊）と、円形の光背が配された玉皇・聖主が描かれる。黒色の衣を着ている元始天尊は最も中央に位置し、元始天尊の前に三つの酒盃が置かれている。元始天尊から見て、左側には、深い緑色の衣を着ている靈寶天尊がおり、右側には紺色の衣を着ている道德天尊がいる。向かって三清の左右には、それぞれに黄色の衣を着る玉皇と黒色の衣を着る聖主が描かれている。どちらも冕を被り、両手を合わせて圭を持ち、左右の両側から中心を向き、中央にいる三清に拝謁する姿勢をとる。

第2層と第3層の中央となる神は白衣の観音である。第2層の観音の肩の左右にあたる場所に若い男女が描かれ、観音の脇侍の玉女と金童であると考えられる（図1-19）。またその左右に名前の知らない神々が描かれている。それから、第3層には、兜を被る將軍のような武将及び、冕を被る神が多く描かれているので、おそらく神将と天帝たちではないかと推測する。

第4層の中央となるのは、盤古とされる三面六臂の神である。⁽²²⁾6本の手のうちの2本に日と月を持ち、高くあげている。また他の2本は胸の前で組み、拝謁する姿勢を作る。残る2本は刀を持っている。この神の左右には刀を持つ兜を被る將軍及び武将らが描かれている。

第5層の中央にいる神は、名称が不明である。その左右には、筆と文書を持っている判官だと思われる文官が描かれており、また両手で圭を持つ文官らも描かれている。

第6層の中央に、兜を被る3人の將軍が描かれている。この三神は、唐・葛・周三將軍であると考えられる。剣を縦に持ち、その両側には、馬に乗って圭を持つ武官らが描かれている。

第7層の中央に、虎に乗り、赤色の衣を着、手に剣を持った太尉と思われる神が描かれている。太尉の両側には、それぞれに二人ずつ功曹と思われる武官が描かれている。⁽²⁴⁾その他には、馬に乗る武官らも描かれている。⁽²³⁾

第8層の中央には、位牌状の物が描かれ、その中に香炉が描かれている。その左右には、6柱の元帥が描かれ、6神とも馬に乗っている。

第9層には、左から、杖を持つ土地公、逆立ちをする張五郎、「犀牛皆上兵」「猛虎毒蛇兵」「麒麟獅子兵」だと思われる、牛・象・獅・虎・麒麟に乗って刀を持つ5武官が描かれている。⁽²⁵⁾また、土地公は中国式の家屋の庇の下に立って描かれる場合もある（図1-19、図2-19、図4-19）。儀礼で用いられる文献には土地公を「住宅土地」と書くこともある。神画に土地公と共に家屋を描くことは、土地公が「住宅」の土地神であることを表しているのではないかと考える。

総壇神画の複数の階層を用いて神々の階位を表すという構図の方法は、道教神仙系譜の『洞玄靈宝真靈位業図』と非常に類似している。よって、ミエンのこの種の神画の創作は、道教の『洞玄靈宝真靈位業図』の影響を受けていると考えられる。特に、総壇神画の第1層の中央の位に描かれる主神の

元始天尊は、『洞玄靈宝真靈位業図』の第1層の中位に描かれる主神と完全に一致していることが見られる。⁽²⁶⁾これにより、ミエンにとっての元始天尊は最高神であることがはっきりと分かる。総壇神画に描かれる神々の階位は、神々の地位の評価でもある。この神画は彼らの信仰神の系譜を反映するイメージ図でもある。総壇神画の第1層から第9層まで、ミエンの信仰している神々の階級を明確にし、彼らが意識している神の系譜を絵画という手段で表現しているといえる。

3-17. 庫官神画に描かれる内容について

本論の読み取る対象とする「庫官」神画は、全部で4点あり（図2-21、図3-21、図4-21、図5-21）、比較的珍しい神画の種類である。「庫官」神画には庫官の官庁内の様子などが描かれている。

神画の最上部に「庫官左」の文字が記されている（図3-21）。上部に長いテーブルが描かれ、その後ろに黒い冠を被り、赤色の上着で、黄色（あるいは赤色）の裳を穿く官員が立っている。この官員は「庫官」と推測する。「庫官」は左手でテーブルに置いてある文書を押さえ、右腕を内側に約120度曲げ、手に筆を握っている。その左右には一人ずつ従者が立っており、右側の従者も「庫官」と同じように筆を握っている。

テーブルの前には人物が跪いており、両腕を開けて手に書類のようなものを掲げ、「庫官」に何かを上奏している。この上奏者の左右には、二人の官員装束の者がそれぞれ椅子に座った姿で描かれている。向かって左側の者は黒色（あるいは藍色）の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕を内側に曲げて腰部に置く。左腕は高くあげ、右側にいる官に話かけている姿勢となる。右側の官は青緑色の上着を着、赤色の裳を穿き、左側にいる官に向き、話を聞く姿勢である。

神画の中央の左右には、両面の壁が描かれている。そこは「庫官」の官庁に入る正門であると考えられる。正門のところに一人の役人と一人の従者が描かれている。

神画の下部には、庫に入れる貨物を点検している様子が描かれる。向かって左側にはテーブルが描かれ、テーブルの後ろに一人の役人が立っており、左手でテーブルの上の紙を押さえ、右腕を内側に曲げ、手に筆を握り、運んできた荷物に記入している。右側に二人の従者と大きな箱が描かれ、従者は左側にいる役者の方に向き、確認できた荷物を報告する姿勢をとっている。神画の最下部には、貨物を担ぐ者、貨物を運ぶ馬を1頭引いている者が描かれる。

3-18. その他の神画について

本項では、以上で分析した17種類の神画以外の神画に描かれる内容について紹介する。

3-18-1. 監齋大王神画に描かれる内容について

神画全体の構図として、上部の中央に監齋大王が描かれ、下部には調理する場面が描かれる。⁽²⁸⁾

監齋大王は、黄色の虎に乗る姿勢で描かれており、武官の帽子を被り、黒色の上着を着、赤色の裳を穿き、黒色の長靴を履く。両鬢の髪は犬耳のような形であり、頭部の両側に立っている。鬚は鍾馗鬚のように鬚まで続く。髪と鬚の色は赤色である。監齋大王の左腕は内側に曲がり、手に金環を持っている。右腕は上に高くあげ、手に剣を持っている。

神画の下部に、民族衣裳を着ている男女が調理している場面が生き生きと描かれている。長い杵を

持って餅を搗く者、その餅を丸める者、竈の前で竹の管で火を吹く者、てんびん棒で水を運ぶ者、薪を切る者が描かれている。

3-18-2. 禁斎神画に描かれる内容について

図4-26 神画は小サイズの神画である。所有者である祭司のZ乙昇氏によれば、この神画はどの神が描かれているのか不明であるため、実際の儀礼では用いられていないという。*Yao ceremonial paintings*の中で、「Kiem Tsei 禁斎」と呼ばれる神画に類似している。その神画には、ミエンの服装をした女神が犠牲用の豚を屠る作業を監督する場面が描かれており、また神画全体の構図と神画に描かれる内容の一部は、Z乙昇氏が持っている図4-26の神画と相似する。よって、筆者は図4-26が「Kiem Tsei 禁斎」と同じ種類の神画と判断し、本論では「禁斎」の名称を引用した[Lemoine 1982: 142-145]。

図4-26の構図としては、上下二つに大きく分かれている。上部の中央には、ミエンの服装をしている女神が描かれ、下部には調理する場面が描かれている。

女神の頭部に円環状の光背が配され、頭に赤色の頭巾を被り、藍色の上着を着、黒色と赤色のスカートを穿き、座る姿勢をとっている。神画の上部は破損しているため、細部まで読み取ることができない。

神画下部に描かれている調理の場面は、さらに上中下の三つの部分に分かれている。上部には、黒色の服を着た二人の男性が杵を持って臼で餅を搗いている。中部の藍色の服を着た3人は、左から右へそれぞれに餅を丸めており、薪を肩に担いで運んでいる。下部には竈が描かれ、竈の前に藍色の服を着る者と、黒色の服を着る男性が立っている。その右側にてんびん棒を担いで水を運ぶ男性が描かれる。

以上の読み取りから、「禁斎」神画の構図及び神画に描かれる内容は、「監斎大王」神画の構図と神画に描かれる内容と非常に類似していることが分かる。Lemoineは、*Yao ceremonial paintings*の中で、通常「Kiem Tsei 禁斎」神画の上部にミエンの服装を着る女性が描かれるが、時には剣を振る男性が描かれることもあると述べている[Lemoine 1982: 142]。「監斎大王」神画の読み取りによって、Lemoineが言っている剣を振る男性は、「監斎大王」を指していると考えられる。「監斎大王」神画は「禁斎」神画の大きいサイズの男神版だといえよう。

3-18-3. 王姥神画に描かれる内容について

ミエンの祭司によれば、「王姥」神画は、またの名を「王姆娘娘」神画ともいうそうである。筆者は江華瑶族自治县でこの種類の神画に関するものを、未だ見たことがない。主に広西壮族自治区恭城瑶族自治县地域で用いられている神画である。ミエンの儀礼神画の中で、女神を主神として描かれているのは非常に珍しい。筆者の集めた資料の中で、この種類の神画は2点（図3-22、図4-22）あり、描かれる内容は次のようである。

王姥神画の構図としては、中央に王姥が大きく描かれ、王姥の後ろには一人の女官がおり、神画の下部には武将の装束を着けている3人の男性の脇侍が描かれている。また、図3-22の最上部には「王姥右」の文字が書かれているのも見られる。

王姥は向かって右を向き、花模様の上着を着、スカートを穿き、若々しく微笑んで瑞雲の上に乗る姿勢をとっている。左腕は内側に曲げ、手には笏を持ち（図4-22）、あるいは瓢箪状の団扇を持つ（図3-22）。右腕は内側に曲げ、手は手訣を結ぶ。「雲鬘」という雲型の鬘に結い、花や簪をつけている。

王姥の後ろには、瑞雲に乗る一人の女官がおり、手には華蓋という帝王の車の上につけた絹がさを持ち（図3-22）、あるいは幡を持っている（図4-22）。下部に描かれる3人の武将は、雲に乗り、正面を向いて描かれている。3人とも鎧を着、手に剣を持って高くあげ、防御する姿勢である。

3-18-4. 四府功曹神画に描かれる内容について

四府功曹⁽³¹⁾神画には、天府・地府・水府・陽間の4人の功曹が描かれているため、また「天地水陽」神画とも称されている。この神画は、一対2点であり、祭壇には左右並列して掛けるため、本論では「四府功曹・左」と「四府功曹・右」⁽³²⁾の名称を使って区別する。四府功曹神画には、どこにどの功曹が描かれるかということは決められていない。

広西壮族自治区恭城瑶族自治县の四府功曹神画は、左右2点の神画に描かれる4人の功曹が中央を向き、左右対称となっている。四府功曹・左（図4-24-1）の上下には、それぞれ虎に乗る地府功曹と龍に乗る水府功曹とが描かれる。地府功曹は、赤色の袍を着、左腕は前へ高くあげ、手に一卷きの文書を持ち、前方に差し出しながら急いで走る姿勢である。水府功曹は、藍色の袍を着、左腕は前へ高く上げ、手に文書を持ち、同様の姿勢をとっている。右腕は高くあげ、手に刀を持つ。四府功曹・右（図4-24-2）の上下に、それぞれ白鶴に乗る天府功曹と白馬に乗る陽間功曹が描かれる。天府功曹は、藍色の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は前へ高くあげ、手に文書を持ち、地府水府と同様の姿勢である。陽間功曹は、赤色の上着を着、黄色の裳を穿き、右腕は前へ高くあげ、手に文書を持って同じく差し出す姿で描かれている。左腕は体の後ろに出し、手に剣を持つ。

4. 神画に描かれる神々について

以上、湖南省永州市江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县の5組の神画に描かれる内容の分析を通し、異なるミエン地域で用いられる複数の同種の神画に描かれる内容の異同を明らかにした。神画に描かれている内容の読み取りによって、これらの神画には、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・王姥・大海旛・海旛張趙二郎・太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・監齋大王・禁齋・天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹・十殿などの神々が描かれていることが明らかとなった。神画に描かれるということは、これらの神々がミエンの信仰している神の世界において高い位にあることを意味していると考えられる。ここでは、まず簡単に5組の神画の共通点及び相違点についてまとめ、それから神画の読み取りを通して見た神々の区分する方法、神々の位、道教的な影響、ミエンらしさについて述べたい。

4-1. 儀礼神画の共通点と相違点

この5組の神画の最も大きな共通点は、異なる地域においてもほとんど元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・四府・張天師・李天師・海旛・十殿・海旛張趙二郎・太尉・綵壇・馬元帥・王靈官・三將軍・庫官の17種類の神画を持っていると考えられる。また、異なる地域にわたって同じ種類の神画に描かれた基本的な内容や主神と脇侍らの特徴もほぼ同じであることが明確になった。このことから、湖南省南部及び広西壮族自治区東北部のミエンは、信仰している神々の体系は同様であると見られる。相違点について、個別の地域では、その地域しか見られない種類の神画を持っていると見られる。例えば、「王姥」という種類の神画は、広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエンしか持っていない神画である。このような相違点から、神画の地域的な特殊性が見えてくる。

4-2. 神画に描かれる神々の区分について

神画に描かれる内容の読み取りを通じ、一部の神の冠や衣服などのスタイルが同様であることに気がついた。神々を簡単に見分けるために、以下では、区分することを試みる。

神画に描かれる神々の冠・服装・持ち物・乗り物などの特徴から分析を行うと、三清・帝王・天師・神将・海旛・功曹・その他に分類できることが判明した。

三清は、御座に座しており、龍と瑞雲模様の袍を着る。髪は頭頂に結び上げ、金冠を被る。神画において中央に位置し、その下部の左右に一人ずつ脇侍が控える。この類にあたる神々は、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊である。また、元始天尊は黒地の袍を着、靈寶天尊は緑地の袍を着、道德天尊は紺色地の袍を着るという出で立ちが特徴である。

帝王は、御座に座しており、冕を被り、圭を持つ。この類にあたる神々は、玉皇・聖主・天府・地府・水府・陽間・十殿である。玉皇と聖主神画において、玉皇と聖主は中央に位置し、その下部の左右に一人ずつ脇侍が控える。天府・地府・水府・陽間を描く神画は、対となるものである。1点にいずれの二神が描かれ、それぞれに神画の上部と下部に位置する。十殿神画において、10柱の閻王と共に地獄の風景が描かれる。

天師は、立ち姿で、八卦袍を着、髪冠を被り、圭を持つ。神画の中央に位置し、下部に脇侍はいない。この類にあたる神々は、張天師・李天師である。

神将は、太尉・將軍・元帥に区分される。太尉は、武官の冠を被り、白馬に乗り、赤色の袍を着、剣を持つ。將軍は、兜を被り、鎧を着、馬に乗り、武器を持つ。元帥は武將の衣服を着、武器を持つ。この類にあたる神々は、太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥である。

海旛は、冠を被らず、額に赤色の縄を縛り付け、こめかみの両側に1枚ずつ符を挟む。虎皮の肩掛けを着、胴着を着、赤色の裳、あるいは赤色のズボンを書く。素足で、足首から膝まで脚絆を巻く。海旛にあたる神々は、大海旛と海旛張趙二郎である。大海旛神画に刀梯を登る場面が描かれているが、海旛張趙二郎神画には描かれていないので、簡単に見分けることができる。

功曹は、鶴・虎・馬・龍に乗り、手に文書を持って進呈する姿勢となる。功曹にあたる神々は、天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹である。功曹を描く神画は、対となるものである。神画の上部と下部それぞれ1点ずつに二人の功曹が描かれている。

以上に述べた神々の他に、今の段階において分類できない神々もあるので、「その他」の類に入れた。

表1 神画に描かれている神々の区分表

区分	容姿の特徴		区分にあたる神々の名称
三清	御座に座しており、龍と瑞雲模様の袍を着る。髪は頭頂に結び上げ、金冠を被る。		元始天尊※・靈寶天尊※・道德天尊※
帝王	御座に座しており、冕を被り、圭を持つ。		玉皇※・聖主※・天府・地府・水府・陽間・十殿
天師	立ち姿で、八卦袍を着、髪冠を被り、圭を持つ。		張天師・李天師
神将	太尉	武官の冠を被り、白馬に乗り、赤色の袍を着、剣を持つ。	太尉※・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥
	將軍	兜を被り、鎧を着、馬に乗り、武器を持つ。	
	元帥	武將の衣服を着、武器を持つ。	
海旛	冠を被らず、額に赤色の縄を縛り付け、両側のこめかみのところに各1枚の符を挟む。虎皮の肩掛けを付け、胴着を着、赤色の裳、あるいは赤色のズボンを穿く。素足で、足首から膝まで脚絆を巻く。		大海旛・海旛張趙二郎※
功曹	鶴・虎・馬・龍に乗り、手に文書を持って進呈する。		天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹
その他	分類以外の神々		王姥※・監齋大王・禁齋・家先

注：※は、神画の下部の左右に脇侍が描かれることを示す。

4-3. 神画の読み取りから見た神々の位について

神画に描かれる神々及びその脇侍たちの顔の向きによって、その中の一部の神の位を推断することができる。

元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主神画に描かれる主神は、神画において中央に描かれ、顔は正面を向き、神画の下部の左右に各一人の脇侍が描かれている。このように描かれる神々は、顔を横向きにし、また脇侍を伴っていない神々（張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・大海旛・海旛張趙二郎・太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・監齋大王など）より位が高い神であると推断できる。

脇侍らの顔の向きを見ると、元始天尊の脇侍は左右の両側から中央を、靈寶天尊の脇侍は左に、道德天尊の脇侍は右に、玉皇の脇侍は左に、聖主の脇侍は右をそれぞれ向いて描かれる。脇侍らの顔の向きによって、元始天尊がこの5神の中で最も中心的な神であり、最高位の神であると推断できる。その左に位置する靈寶天尊は第2位、その右に位置する道德天尊は第3位、また靈寶天尊の左に位置する玉皇は第4位、道德天尊の右に位置する聖主は第5位であると推断することができる。

この位の配列は、総壇神画にも見られる。本稿の「3-16. 総壇神画に描かれる内容について」で述べたように、総壇神画には、上から下まで九つの階層に分けて描かれている。他の種類の神画に描かれる一部の神々は、この九つの階層のいずれかの位置に配置されている。総壇神画の最も上位と思われる一番上となる第1の階層に、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の5神が描かれ、その

中央の位に元始天尊、左の位に靈寶天尊と玉皇、右の位に道德天尊と聖主が配置される。この配置から、ミエンにとって三清である元始天尊・靈寶天尊・道德天尊は最も上位の神であり、その次は玉皇と聖主となる。さらに三清の中には、元始天尊の位は最も高いということがはっきりと見えるのである。総壇神画から見たこの5神の位は、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主神画に描かれるこの5神及び脇侍らの顔の向きによって推断した位と完全に一致している。

元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の他には、総壇神画の第6層の中央に上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍が配置され、第7層の中央の位に太尉が配置され、第8層の左右の位に鄧元帥などの6柱の元帥神が配置されている。総壇神画から、ミエンが自ら信仰している神々に対し、明確にその階層を区別していることが見て取れる。

4-4. 神画の道教的な影響

ミエンが持っている神画に描かれる元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇などの神々とは、民間道教のパンテオンのヒエラルキーの最上段を構成するところの、道教の「十八主神」であることが判明したとされる [竹村 1981:160-161]。ミエンの儀礼神画に道教神を描くことは、始めから道教の影響を受けていることを示していると考えられる。

本論で取り扱う5組の神画に描かれた、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・張天師・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・十殿などの神々は、道教系の神であることが判明できる。神画に描かれたこれらの神々の容貌・髪型・衣裳の様式なども、道教絵画の同様の名称を持つ神々と相似しているばかりでなく、特に、湖南省永州市江華瑶族自治県のミエン地域の神画は、該当省の民間絵画の画風と非常に類似していることから、ミエンの祭司が持つ儀礼神画は、道教の神画の様相を受け入れていると同時に、その地域の民間絵画からの影響も受けられていると考えられる。さらに、神画からは道教の閩山派及び梅山派の影響を受けていると見做される。本論で取り扱う神画の中には、閩山教の信仰神の王姥が描かれる神画がある。また、大海幡神画に黄色の幡を付けた竹竿及び刀梯を登るシーンが描かれている。これは閩山教の「建幡伝度」の際に行われる「上幡竹」と「上刀梯」という二つの儀礼を表している⁽³⁸⁾と考える。すなわち王姥神画の所持及び、大海幡神画に描かれている内容は、閩山教の影響を受けている証であろう。ミエンなどの西南少数民族の宗教信仰において、梅山教や閩山教などの教派の名称が見られることから、道教と少数民族の宗教文化は互いに浸透しているとされる [張 2010:140]。こうした点からミエン神画に描かれた梅山教と閩山教の神々は、ミエンの宗教文化と梅山教や閩山教が融合した結果であるといえる。

また、神画の構図に注目すると、主神は中央に大きく描かれ、脇侍は下部の左右、あるいは主神の後ろに配置されている点で、道教絵画の構図とほぼ一致している。特に注目したいのは、総壇神画の構図である。総壇神画の複数の階層を用いて神々の階位を表すという構図の方法は、道教神仙系譜の『洞玄靈宝真靈位業図』と非常に類似している。そうした点からも、ミエンの神画は道教の影響を大きく受けられているといえる。

このように神画に描かれた神々、構図に注目するとミエンの儀礼神画は、ミエン自身の宗教文化のみによって描かれているのではなく、梅山教、閩山教、そして道教の影響を受けているのである。

4-5. 神画から見たミエンの特色

ミエンの伝承している儀礼神画が、道教の影響を受けている点について上述した。しかし、あくまでも影響を受けたということで、道教の神画と同一のものではなく、ミエン自身の特色を持っている。

儀礼神画を見て、直観的に感じられるのは、赤色が非常に多く使われているという点である。赤色は気持ちを高めることができ、注意を引きやすく、また中国古代においては魔除けや吉祥などの意味を持っているとされる [黄ほか 2009: 49]。このような儀礼神画は儀礼時に祭壇に掛けると、非常に人目を引き、荘厳な雰囲気を作ることができる。特に、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の5神の背後に、深紅の大きな炎状の光背が描かれる。赤色の効能及び大々的な表現手法を通し、この5神は、ミエンの奉ずる神々において位と法力が高いことを表現していると考えられる。このような光背の描き方は、道教絵画や漢族の民間絵画や仏画などいずれも使われていない表現の手法であり、ミエンが作り出した絵画の独特の風格を持っているのである。

ミエンの儀礼神画には、道教神の他に、ミエンが独自に奉ずる神が描かれている。すなわち、ミエンの祭司の祖とされる李天師、ミエンの祭司に術を伝えた人物とされる海旛⁽⁴⁰⁾、授法する祖師である太尉、監齋、家先（家の先祖）などの神々である。ここで注目したいのは、この中の監齋と大海旛が描かれた神画である。

最もミエンの特色を持つ神画というならば、やはり監齋神画であろう。何故なら、監齋神画は、ミエンの民族衣裳を着た数人の男女が描かれているからである。描写の内容は、竈の前で竹を使って火を吹いたり、天秤棒で水を運び、薪を切り、堅杵を持って餅を搗き、丸め、供物とする餅を作っている場面が描写されている。それぞれが分担された異なる仕事をこなしている様子がよく表現されている。

大海旛神画には、上記のように、刀の梯子を登る「上刀梯」儀礼の場面が描かれている。「上刀梯」儀礼は、ミエンの度戒儀礼で必ず行われる儀礼科目であり、受礼者が乗り越えなければならない試練の一つである。大海旛神画には、大海旛の他に、儀礼の場である雲台、そこに掛ける十二本の刀で作られた刀梯、刀梯を登る正装の受礼者、雲台の上に立つ人物などが描かれる。さらに雲台の上に立つ人物は、角笛や師棍などの法具を持っていることから、儀礼を行う祭司であると考えられる。雲台の下に跪く正装の受礼者、チャルメラを吹奏する者、ドラを鳴らす者などの内容が描かれ、「上刀梯」儀礼を行う場面を生き生きと描写している。各人の目線は刀梯を登る受礼者に集まり、儀礼に注目している様子がよく表現されている。

監齋と大海旛神画に描かれるように、儀礼時の調理風景及び彼らが伝承している儀礼の内容を生き生きと絵画で表現することは、ミエン儀礼神画の代表的な特色⁽⁴¹⁾であると考えられる。

こうした神画に描かれた神々の持ち物からもミエン独自の特色が見えてくる。神画に描かれる内容の分析により、太尉や海旛張趙二郎などの神画に描かれる主神及び脇侍らは、酒盃や法具の角笛を持っていることが分かる。酒盃はミエンの儀礼時に神に献ずる酒を入れる器として使われるだけでなく、茶油を入れて灯明にし、ミエンの通過儀礼「掛三灯」「度戒儀礼（掛十二盞大羅明月灯）」の際に掛ける灯りとして使われる。角笛は祭司が天門を開く「開天門」儀礼の際に吹き鳴らす重要な法具であり、それと同時に天門を開くという最高レベルの呪法を行う祭司の能力も示していると考えられる。すなわち、酒盃を持って描かれた神々は祭司の師であることを象徴しており、角笛を持って描か

れるその神の脇侍らは、師に従う祭司自身を象徴していると考えられる。道教の神画では、元始天尊は丹丸（丸形の練薬）、靈寶天尊は如意、道德天尊は団扇、文官は圭、武官は様々な兵器を持つという特徴があるが、ここで見られる酒盃と角笛のような持ち物は描かれない。こうした点からもミエン儀礼神画自らの特色が見えてくる。

おわりに

本稿では、湖南省南部及び広西壮族自治区東北部の5つの異なるミエン地域の儀礼神画に描かれた内容について詳細な読み解きを行い、比較分析を行った。ミエンが伝承している儀礼神画に描かれている内容の全体を明確にするには、湖南省及び広西壮族自治区の儀礼神画を考察することだけではなく、中国南部及び東南アジア北部の山地に広く分布するミエンの居住する各地域との比較研究を行われなければならない。まだ神画に関わる図像分析に留まらず、神画に描かれる神々に関する儀礼文献の解読や、儀礼における神画使用の実態の把握など、多方面からの考察をしなければならない。まだ多くの課題が残されているが、今後の研究の中で一つ一つ解明していきたいと考えている。

注

- (1) 本地図は、インターネットからダウンロードした白地図に地名を加えて作成したものである。
- (2) 木の靱皮繊維で作られる紙である。色は白く、紙質は柔軟で靱性があり、繊維が細長く木綿のようであるため、「綿紙」と称する。
- (3) 棒形の法具である。
- (4) 盤王祭は、旧暦10月16日（盤王誕生日）に行われるヤオ族の祖先祭祀活動である。
- (5) この神画の名称は、神画の裏面に記された名称を転写したものである。
- (6) この神画の名称は、神画の裏面に記された名称を転写したものである。
- (7) この神画の名称は、神画の上部、及び裏面に記された名称を転写したものである。
- (8) ミエンの男性は必ず祭司となるイニシエーション（筆者注：通過儀礼）を経なければならないとされ、祭司としての法名も得てはじめて家を継承する資格つまり先祖の祭祀を行い死後祭祀を受ける資格を獲得することになり、法名は代々の先祖の法名が連記される家単位に加えられる（掛灯儀礼）。その上でさらに祭司としての段階の最高位を獲得するために行われるのが度戒儀礼である〔廣田 2013：1-25〕。
- (9) 神画に魂を注入すること。
- (10) この神画の名称は、主に裏面に記された名称を転写したものである。
- (11) 1970年代前半、文化大革命のさなか中国で展開された、林彪と孔子を批判する運動のこと。孔子及び孔子が説いた儒教、そして儒教を復活させようとする者とされた林彪が激しい批判の矢面に立たされた〔矢吹 1989〕。
- (12) 湖南省永州市藍山県の祭司の趙金付氏によれば、神画は兵馬の一種であるという。従って、他の祭司が持っている神画を自分の物にすることは、他人の持っている兵馬をもらうことと同じことである。もらった兵馬を自分の兵馬と合わせて一つにしなければならない。このために行われる儀礼は、「合兵合将道場」という。
- (13) 神画の名称は、調査の際に聞き取ったものである。
- (14) 腕部を突き立てること。
- (15) 手の指で訣（奥義）を結ぶこと。また、その指の形。
- (16) 巻きスカートのように腰に巻きつける下衣である。

- (17) 上がピラミッド形で下方が角柱状の玉器である。
- (18) 古代兵器の一種である。
- (19) 旒（リュウ）。皇帝の冠の前後に垂れる玉飾りのことである。
- (20) 中央部から離れた目立たない所。隅っこ。
- (21) 総壇神画には、約70柱以上の神々が描かれている。よって、他の神画と同じように、神画に描かれる内容を細分化して項目に分けて表で示すことが非常に難しい。そのような理由から、本論では総壇神画に描かれる内容の異同を示す表を作っていない。
- (22) 廣田律子は2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 350頁の中で、総壇神画の第4層の中央に描かれる6本の腕を持つのは盤古であると指摘する。
- (23) この神の姿勢・冠・服装・持ち物からうかがえる様子は、神画に描かれる太尉に非常に似ている。よって、この神は太尉と推断する。
- (24) 手に文書を捧げるのは四府功曹の特徴である（四府功曹の特徴については、本稿の「3-18-4. 四府功曹神画に描かれる内容について」に詳述している。）よって、この4人の武官は天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹と推断する。
- (25) 廣田律子は2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 350頁で、総壇神画の最下層に描かれる虎・牛・象等に乗る5武將は五猖であると指摘している。
- (26) 李劍楠は2014「道教神仙系譜『洞玄靈寶真靈位業図』について」『中国哲学論集』37号九州大学中国哲学研究会 20-57、24頁で、「洞玄靈寶真靈位業図」神仙系譜の構成について説明し、その第1層の中位の主神は上清派に崇拝される最高の神の元始天尊であると述べている。
- (27) 庫官は臺南の功德で極めて重要な紙銭を冥界に送る填庫科儀にかかわる神である〔丸山 2004：385〕。
- (28) 儀礼神画に描かれる監齋大王はどのような神か不明である。『道教儀禮文書の歴史的研究』によれば、「監齋法師すなわち靈寶監齋大法師真君」であるという〔丸山 2004：231〕。ここの監齋法師と儀礼神画に描かれる監齋大王が同一神であるかどうか未確認である。
- (29) 内容の一部とは、「Kiem Tsei 禁齋」神画の上部に描かれる民族衣裳を着る女神・下部に描かれる竈・てんびん棒で水を運ぶ人物などの内容を指す。
- (30) 葉明生によれば、「王姥」は即ち「王母」であるという。しかし、この「王母」は伝説の「西王母」ではなく、閩山教中の最高位の女神のことを指すと指摘している〔葉ほか 2004：368-375〕。
- (31) 功曹は、三清などの高位の神々に文書を届ける役割の神の一種である〔丸山 2004：258〕。
- (32) 祭司の趙金付氏によれば、四府功曹神画は「天地水陽」とも呼ばれ、天府・地府・水府・陽間の4人の功曹であるという。「陽間」に関して、儀礼文献には「陽間」「陽府」「陽界」と書かれているものも見られる。本論では祭司の呼び方に従い、「陽間」を使う。
- (33) 野口鐵郎ほか 1996『道教事典』平河出版社 105、206、212、243、401、408、584、612頁
- (34) 大阪市立美術館 2009『道教の美術 TAOISM ART』テーマ展図録 読売新聞社
- (35) 左漢中 1994『湖南民間美術全集・民間絵画』湖南美術出版社
- (36) 葉明生 2004「道教閩山派与閩越神仙信仰考」『世界宗教研究』第3期 64-76頁に、閩山教で信仰される王母（王姥）、許九郎、徐甲、盤古仙師、張趙二郎、張五郎などの神々について詳述している。
- (37) 葉明生 2012「建幡伝度：閩山派的伝承、整合与宣示」『第二届國際瑶族傳統文化研討會——資源与創意會議論集』15-38頁によると、「建幡伝度」は「伝度醮」「開戒壇醮儀」とも称され、中国南方各地の民間道教においてよく見られる内部の伝度奏職儀礼であるという。
- (38) 幡を付けた竹竿を登る儀礼である。
- (39) 刀の梯子を登る儀礼である。
- (40) 廣田律子は2011『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 352頁で、「宗教文献に記された神名や軸に描かれた神像からは道教からの影響を色濃く受けていると言えるが、長年かけて道教神が受容されミエンの独自の神体系が形成されている。三清神を最高神とし、太上老君・玉皇大帝・太歳・張天師・馬元帥・唐・葛・

周三將軍等道壇に掛けられ祀られる神々との一致をみることができる。一方で張天師の対面に掛けられた李天師はミエンの宗教職能者の祖と考えられ、また海旛もミエン独自の法術を授ける守護神といえる。」と指摘している。

- (41) 大海旛神画及び監齋神画に描かれているミエンの民俗文化を反映する、「刀梯」を登ること及び祭祀時の調理場面から、ミエンの祭祀活動に用いられる絵画の世俗化傾向が見えるとする [左 1994: 43]。

参考文献

〈和文〉

- 大阪市立美術館 2009 『道教の美術 TAOISM ART』テーマ展図録 読売新聞社
 神奈川県立金沢文庫 1991 『地獄と十王図』テーマ展「地獄と十王図」図録 集巧社
 窪徳忠 1986 『道教の神々』 平河出版社
 竹村卓二 1981 『ヤオ族の歴史と文化——華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究』 弘文堂
 津田徹英 1991 「第二部 十王とその造形」『地獄と十王図』 集巧社
 野口鉄郎 福井文雅 坂出祥伸 山田利明編 1994 『道教事典』 平河出版社
 廣田律子
 2011 『中国民間祭祀芸能の研究』 風響社
 2013 「構成要素から見るヤオ族の儀礼知識——湖南省藍山県過山系ヤオ族の度戒儀礼・還家愿儀礼を事例として——」『國學院中國學會報』第58輯 國學院大学中國學會 1-25頁
 丸山宏
 2004 『道教儀禮文書の歴史的研究』 汲古書院
 2010 「道壇と神画」『道教美術の可能性・アジア遊学 133』 勉誠出版 132-146頁
 矢吹晋 1989 『文化大革命』講談社
 吉野晃 1994 「タイ北部のミエン・ヤオ族の儀礼・総体的祭司制・漢字使用——儀礼に見られるヤオ族の「漢化」の一側面」『儀礼・民族・境界——華南諸民族「漢化」の諸相——』 風響社 53-77頁
 李劍楠 2014 「道教神仙系譜『洞玄靈寶真靈位業図』について」『中国哲学論集』37号 九州大学中国哲学研究会 20-57頁

〈華文〉

- 黄建福
 2008 広西民族大学修士論文「盤瑤神像画研究——以広西金秀道江村古堡屯盤瑤神像画為例」
 2009a 「盤瑤神像画之作画目的及社会作用」『芸術探索』第23卷第1期 43-44頁
 2009b 「論芸術人類学視野中的盤瑤神像画」『広西民族研究』第98期 70-77頁
 2010 「論盤瑤神像画的审美意識及其芸術風格」『河池学院学報』第30卷第6期 55-60頁
 2012a 「論瑤族神像画研究的文化意義与現代價值」『貴州大学学报・芸術報』第27卷第1期 120-124頁
 2012b 「論瑤族神像画的源流及其与瑤族伝統文化的關係」『西南边疆民族研究』第11輯 181-191頁
 2012c 「論瑤族神像画的源流」『湖北職業技術学院学報』第15卷第3期 44-51頁
 黄遠 劉素平 2009 『色彩構成』 天津大学出版社
 王秋桂 葉明生 勞格文 2007 『中国伝統科儀本彙編(10)・福建省建陽市閩山派科儀本』 新文豊出版社
 王秋桂 李豊楙 1989 『三教源流聖帝佛祖搜神大全』 臺北：臺灣學生書局
 1988 『瑤族研究論文集』 民族出版社
 左漢中 1994 『湖南民間美術全集・民間絵画』 湖南美術出版社
 周飛戩 2011 「永州盤瑤神像画」『民族芸術研究』第3期 民族芸術研究編輯部 70-74頁
 張澤洪 2010 「中国西南少数民族梅山教研究的文化意義」『少数民族宗教研究』第4期 134-140頁

葉明生

2004 「道教閩山派与閩越神仙信仰考」『世界宗教研究』第3期 64-76 頁

2012 「建幡伝度：閩山派の伝承、整合与宣示」『第二届国际瑶族传统文化研讨会——资源与创意 会议论文集』15-38 頁

〈歐文〉

Jacques Lemoine 1982 *Yao Ceremonial Paintings* Copyright by WHITE LOTUS CO. LTD. in Bangkok